

人と組織の
新・論・点

CATALYST*

カタリスト

渡邊奈々氏

120以上の社会起業家へインタビューした写真家

初志を維持し 世の中を変革する



ソーシャル・アントレプレナーシップ（社会起業）とは、「社会福祉」と「お金を得るための起業」というまったく相反する概念を組み合わせた造語です。2000年秋に私はたまたま友人からその言葉を聞き、研究の第一人者であるハーバード大学のジェッド・エマソン教授に会いに行きました。そこで、「世の中の問題や矛盾に一足先に気づき、これから社会を変えていく先端的な生き方であり、働き方だ」と教えてもらいました。

揺るぎない決心が 成否を左右する

その話に何かを感じた私は、心のさざ波に導かれて6人の社会起業家に取材しました。

そして、日本の雑誌に「社会的起業家とはなにか？」という特集を掲載したのです。その後、記事を読んで人生の方向を転換した方々に出会いました。やはり皆新しい価値観を持って仕事に取り組むロールモデルを探していたのだと思いました。身の回りの問題や

矛盾を「しょうがない」と諦めるのは日本人の体質ですが、その体質を知りながらあえて挑戦する前向きな方々に出会えました。

それから私は120以上の社会起業家を取材してきました。コモン・グラウンド・コミュニティ代表のロザヌ・ハガティ氏は、ニューヨーク・マンハッタンの廃墟を、ホームレスたちの心安らぐ住まいとして再生する活動に取り組んでいます。彼女のおかげでマンハッタンの路上からホームレスが少なくなっただけだと言われています。彼女は社会起業家として一番大切なことは「初志をいかに維持するか」だと言います。今まで何十年、何百年と続いた問題は1人のアイデアだけですぐに変えられるものではありません。この問題を絶対に解決するという気持ち。自分が生きているうちには無理だとしても、誰かに引き継いででも解決したいという、揺るぎない決心。これが、社会起業家の成否を決めるのだと思います。拙書で紹介した“チェンジメーカー”の中には、数十万人規模に影響を与えるよう

になった人もいます。

活動の原動力は 相手の立場に立つこと

現場とともにあり続けることも大切なポイントです。ハガティ氏は、ドラッグやお酒などの中毒症状を抱えた数千人のホームレスひとりひとりの名前と状況を覚えています。疲れを知らない彼女の原動力は、困っている相手に対する人一倍深いコンパッション（真の共感）なのでしょう。また、とあるシンガポールの社会起業家は、子供の頃に学校の先生から「足を1本だけ紐で結び、あそこまで走りなさい」と言われました。そして、走り終えると「これが身体障害者の抱えているものだ」と教えられたのです。そのときに彼は、社会的に恵まれない人々の立場に立つことを学んだと言います。要は、現場に居て、どれだけ相手の立場に立った物事の考え方ができるかではないでしょうか。コンパッションは、チェンジメーカー（=変革者）の核となる能力だと思います。

文/前川裕志 撮影/平山諭

PROFILE わたなべ・なな

慶応義塾大学卒業。ニュージャージー州シートンホール大学バイリンガル教育修士課程終了。1980年ニューヨークで写真家として独立。1987年アメリカン・フォトグラファー誌年度賞。2005年「チェンジメーカー〜社会起業家が世の中を変える」、2007年には「社会起業家という仕事〜チェンジメーカーII」を出版(ともに日経BP社)。